

コミュニケーションが難しい利用者への支援
～折り紙、食事の支援を通して～。

18CC11 杉山 真緒

I. はじめに

特別養護老人ホームは、在宅での生活が困難になり要介護の高齢者が入居できる場所である。

今回担当させて頂いた A 様は、聴力には問題ないが、会話が難しく質問には簡単な返答がある方であった。

II. 実習先種別・実習期間

介護老人福祉施設

(2019年6月24日～7月23日 (うち23日間))

III. 事例紹介

A 様 97 歳 女性

主な疾患 肩関節屈曲、右脳梗塞。

(1) 移動: リクライニング車いす

(2) 食事: ミキサー食、全介助、リクライニング車いす角度 80 度、みそしる、お茶はとろみをつける。食欲あり、嚥下状態ムセあり、全量摂取

(3) 入浴: 個浴 職員 2 人で全介助、体調が悪いときは、機械浴

(4) 排泄: トイレで排泄、職員 2 人で介助、日中 リハビリパンツ+ビック 夜間 テープ式おむつ+スーパービック

(5) コミュニケーション: 聴力には問題ないが、会話が難しく質問には簡単な返答がある

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

自ら話すことはないが質問すれば返答が返ってくる。そのため、他者と話す場を提供することで A 様の生活がより良いものになっていくと考えられる。

2. 介護上の課題

他者との関わりが少ない様子が伺えた為、折り紙や食事のときに職員、他者とのコミュニケーションを行う必要がある。

3. 介護目標

長期目標: 手指の拘縮が進まず楽しい生活を送ることができる。

短期目標：他者とのコミュニケーションを図ることができる
→折り紙や食事を通してコミュニケーションを行う。

V. 実施及び結果

7月10日

A様に「今から折り紙を折りますよ」という声掛けを行うと、「分からない」という返事が返ってきた。また、「鶴折りますね」と声掛けを行うと、利用者は「鶴」という返事が返ってきて、支援者が折るのを見ていただきながら、コミュニケーションを図った。

7月16日

A様に「今からお食事ですよ」という声掛けを行い、食事介助を行う前に今日の献立について説明をした。支援者が「おいしいですか」と声掛けを行ったら「おいしい」と言われていい、全量摂取に繋がった。

VI. 考察

他者とのコミュニケーションが少なく生活に楽しみがないため折り紙や食事の際のコミュニケーションを7月10日、7月16日に行った。折り紙では、説明内容が難しくA様と上手くコミュニケーションを図ることが出来なかった。食事の際は、A様が食べるものが分かっていたためか、うなずきや「美味しい」といった言葉が聞かれた。A様にとって、身近であるものや、分かりやすい質問がコミュニケーションには有効であると考えられた。中村¹⁾らは、メッセージを伝える伝達経路には言語的チャンネル、非言語的チャンネルがあると述べている。今回の介護計画では言語的チャンネルのみに着目をしてきたため、もう少し非言語的チャンネルに着目する必要性があり、後藤²⁾は、「相手が話したいかどうかという気持ちを確認することが大切である」とも述べていることから、利用者に寄り添った支援が必要であると改めて感じる事ができた。

VII. おわりに

介護計画の立案では、情報収集は出来たが、その後の課題抽出と計画を立てるのは、とても難しく、評価についても同様に難しさを感じた。また、事例研究で様々な書籍に触れることで、支援者自身の新たな知識の獲得に繋がることも実感できた。

参考・引用文献

- 1) 介護福祉士養成講座編集委員会「新・介護福祉士養成講座 5 コミュニケーション技術」中央法規出版株式会社.p9.
- 2) 後藤真澄、森田直子、若松離昭(2007)介護実習に役立つコミュニケーションの良い例・悪い例 中央法規出版株式会社. p55.